

弓削 達著

『地中海世界とローマ帝国』

大西 陸 子

この本を手を取って、まずはじめに感じるのは、表紙のブルーが、地中海世界を語るのに如何にもふさわしいということ。昨年春の「地中海学会」の創設にも見られるように、地中海文明への関心が、とみに高まりつつある昨今である。丁度この時に、岩波書店の『世界歴史叢書』（全二十四冊）の第一回配本として世に問われた弓削達『地中海世界とローマ帝国』は、同時に刊行された太田秀通『東地中海世界』と並んで、古代世界へのロマンを、いやが上にもかきたてるかのようにである。

ところが一旦ページを開くと、そのようなロマンチックな想念など、きれいさっぱり消し飛んでしまう。弓削教授の「はしがき」での謙虚な表現にも拘らず、私が見る限り、これは紛れもない「専門的な研究書」であり、しかもその中でも説解に労力を要するものの一つである。よく知られた氏の共同体論を核として、戦後の内外の学界における研究成果が大幅に取り入れられており、学説史紹介や注も細かく、かなり論文集的な著作である。今、この書の内容すべてを扱う余裕はとてもないので、全五章それぞれを簡単に要約・紹介した後で、私なりの感想と意見を些か述べるとどめたいと思う。

第一章「地中海世界とローマ帝国」において、著者はまず「地中海世界」という言葉の定義からはじめる。ここにいう地中海世界とは、気候・風土その他の自然的環境によって限定される地理学的概念ではなく、歴史上のある時点で成立し、ある時点で崩壊した、歴史的形成物としての「一世界であることが明らかにされる。そして、そのような意味での「地中海世界」なるものは果して存在するのか、また存在するとすれば、それは如何なる意味においてであるのか、それを問うのが本書の目的であると、著者はいう。

次に、資本主義成立以前の段階においては、「一つの世界の性格を決定するものは、共同体の性格ないしは構造である」(一〇頁)という前提に立つ著者にとって、共同体とは何かという問題がおこってくる。弓削氏が引用するところのシュタエルマン女史によると、共同体とは、歴史的に形成され、内部に閉鎖的で、多かれ少なかれ同質である人間集団のことであり、ある面積の土地に対して絶対所有権を有し、共同財産の利用に際して共同性を發揮し、自治であり、社会心理のおよび宗教的統一体を形作る集団のことだという(私自身納得しかねるが、とにかくそう書いてある)。そしてこの共同体は、生産諸力と生産諸関係の一般的発展を基礎として、たえず変化・発展するのだという。更に女史によると、ポリスは他の種類の共同体に影響を及ぼし、その分解を早めるが、しかし、ポリスに従属した後も、共同体的組織は失われることなく、ひいてはそれら諸共同体の広汎な存在が、古典的奴隸制を支えたのだという。

以上をふまえて著者は、地中海世界を一つの歴史的世界として特徴づけた共同体とはどのような共同体であったのかという、根

本問題に立ち帰り、次のように言う。「古典古代的形態」の共同体こそが、他の様々な形態の共同体に影響を及ぼし、それらの発展と分解を促しつつ自らの方へと引き寄せ、また、古典古代的政・文化を主導したのである。又、地中海世界における「中心と辺境」の問題に関しては、全体の中心と周辺部としてではなくて、多くの地域的中心とその周辺部の関係として把握されなければならない、と。

次に問われるのは、このいわゆる古典古代的形態の共同体の特殊性とは何か、という問題である。氏はここで、これらの共同体の「運動法則」なるものを定義しようと試みる。氏によると、地中海世界における共同体発展のモデル・コースとは次のようなものであった。諸中心⇨都市の磁力に吸い寄せられてその商品貨幣関係に巻き込まれると、諸共同体の共同性は急速に弱まって私的所有の原理が広まり、村落共同体となり、やがていくつかの村落共同体が合体してポリスへ、即ち「古典古代的形態」の共同体へと発展するという。そして、この商品貨幣関係、交換と流通の急速な発達の本格的な条件となったものが、まさに地中海そのものの存在であったというのである。氏によると、これら市民共同体の特質は、(一)分解の速度が早い、(二)その発展過程で奴隸制が生み出される、(三)分解に対する復元力が強い、の三点である。

続いて、古典古代の共同体の構造的特質はその物質的基礎をなす土地所有に現われ、この物質的基礎に依りて、様々な程度の民主政が現われると考える氏は、ギリシア史とローマ史上の諸事件を、市民共同体の分解と復元として跡づける。そして、ギリシアのポリスではなくてローマが、地中海世界を統合して、現実的な

一つの世界を形成した原因は、両者の植民方法の相異にあると捉えるのである。ギリシアの場合、植民市は母市から独立した新たなポリスを形成したが、ローマの場合には、植民市は母市から独立した国家とはならず、植民者は母市のトリブス(区)に編入されて、ローマ市民共同体の一員であり続けたということ。及び、他の共同体の成員に必要に応じて市民権を与えろという、他に類をみない開放的な市民権政策。この二つによって、ローマの場合の植民は、市民共同体の拡大と外からの増強を意味し、共同体分解の激しさが、かえって共同体の拡大をもたらす結果を招いたと結論される。

紹介がやや長くなったが、この章は本書全体の展望を述べた部分であって、最も読みごたえがある。より簡単には、昨年六月に出版された、弓削達・伊藤貞夫編『古典古代の社会と国家』の弓削氏による序文が、丁度この章及び全体の要約となっていたので、それを参考にされるとよい。第二章以下は、第一章で提起された問題を個別に掘り下げており、テーマがやや具体的になってくる為、比較的理解しやすい。

第二章「ローマ帝国支配の共同体論的構造」は、地中海地方を一つの現実的世界として形成したローマ帝国の支配が、市民共同体の分解の阻止と復旧における、ローマ的特殊性を支えとしていたことを指摘した前章の後を受けて、そのようなローマ的特殊性がどこから来たものかという考察を行なっている。

ここでは、前四世紀初めのウェイイの占領から、後二二年のカラカラ帝告示にいたるまでの、「ローマ市民共同体」の分解及びその阻止と復旧の過程が、植民市と公有地先占の問題を中心と

して述べられている。共和政期に関しては、グラックス改革その他の重要な問題が、共同体の分解と復元という言葉を使って説明されており、帝政期に関しては、植民市の建設と市民権付与の二つによる、ローマ帝国（弓削氏の言葉では「ローマ市民共同体」）の拡大とその限界が語られている。

氏は、ローマの支配構造を次のように図式化する。ローマは、原始的な共同体からポリスに至るまでの、多種多様な共同体を支配したが、ローマ市民共同体のみが支配共同体であり、その他の共同体は従属共同体であった。そこにおいては、支配・被支配の区別は、ローマ市民権の有無であった。この支配共同体は、植民市の建設、市民権の付与等によって地中海世界全域に拡大して行き、一個人や家族のみならず、一つの共同体や都市もまた、階梯を一段ずつ上昇して行き、支配共同体に入っていた。そして、この拡大が行きつくところは、市民権の名目化、即ち市民権に付属する特権の喪失であり、それは二二年の告示によって確認された。ここに古い支配構造は崩壊し、新しく誕生するのが、従来の市民と非市民に代る、'Honestiores' と 'humiliores' という二つの身分によって構成される社会なのであった。

次は、第三章「地中海世界とローマ帝国の奴隸制論的構造」である。ここでは、奴隸制の発展を共同体論の中に位置づけることが試みられる。まず、例によって、奴隸制とは何ぞやという概念の規定から始まって、実証史学とマルクス主義史学それぞれの、奴隸制に関する研究成果が紹介される。近年の実証史学の成果として、第一に、マルクス・エンゲルスの理論形成にあたって前提となつた、アテナイオスの伝える古代ギリシアの奴隸数が誤説で

あつたことが指摘される。古典古代の如何なる地域・時期においても、奴隸制が支配的な経済的制度であつたことはないのである。第二点として、古典古代においては、奴隸と自由人という二種類の人間群に社会が二分されていたのではないということ、即ち、古代奴隸制の「構造上のゆるやかさ」が指摘される。第三に、農業だけに限定しても、奴隸制社会の名に値するものは、前二一世紀のイタリア（及びシチリア）のみであるという指摘がなされ、最後に、歴史的事実として奴隸の階級闘争を過大評価すべきではないとする説が提出される。これらの実証史学の主張のほとんどが、今日のマルクス主義に立つ歴史家の多くによつても認められているという事実は、注目に値しよう。

続いて、奴隸制が共同体に及ぼす分解作用の問題が取り上げられる。どういふ訳か、ギリシアの奴隸制に関する記述の方が長いのであるが、ともかく、地中海世界は「奴隸制社会」への方向性と傾向性をそなえた、いわば「可能的奴隸制社会」であつたという、一応の結論が導き出される。ローマの全属州の中で、奴隸制的構造がある程度明確なのは、シチリアだけである。従つて、ローマ時代の地中海世界は、いまだ現実的な奴隸制社会ではなかつたというのである。また、ローマの支配は、いわゆる「ローマの平和」をもたらしたことによつて、奴隸制存在の基本的条件である「慢性的戦争状態」に終止符を打つ役割をも演じたことが、つけ加えられている。

続く第四章では、「イタリアにおける農業構造の変化」が論じられる。イタリアの農業が、ローマ帝国の農業全体の中でどの様な比重を持っていたかという問題は別にして、ここでは、共和政

末期から帝政初期にかけてのイタリア半島における農業の経営形態の問題——端的に言えば、奴隸制から小作制への移行の問題が論じられる。その移行の原因が、奴隸制よりも小作制の方が生産性が高かったからなのか、それとも地主層内部において、地代寄生生活者の精神が増大したからか、あるいは市場関係の変化によるものなのかという問題が、キーヒレ、ブロックマイヤー、シュタエルマン、ギュンター、ヘルト、ブラッハナーらの説を引用して論じられている。

この問題に関してロストフツェフは、帝政初期イタリアにおける奴隸制ウィラの衰退、小作制への移行の原因を、奴隸制ウィラの生産品（特に葡萄酒・オリブ）の販路の縮小に求めている。彼によると、いわゆる「属州の経済的解放」が、イタリアの規模奴隸制ウィラの葡萄酒・オリブ生産を脅かした。それは、一方では巨大土地所有の形成を促進したが、他方ではまた、葡萄酒・オリブ油生産の拡大に伴うそれらの生産過剰と、全国的な穀物不足がもたらされた。その結果、経営上の危険を伴うそれらの作物の生産は、奴隸制からより安全な小作制へと切りかえられ、ますます地代生活者の性格を強めた地主たちは、穀物生産へと移っていったのだという。

これに対してウェーバーは、販路の縮小ではなくて、国境政策が守勢に転じた結果、奴隸の供給が停止したことに、奴隸制衰退の原因を求めたが、これは今日ではフォルクマンらの研究によって否定されている。著者自身は、「ひたすら商業的作物の生産へと傾斜した奴隸制所領経営は、商品貨幣関係の過度の発達ゆえにはなく、その成立の大前提であった商品貨幣関係の衰退によ

って、その存立の経済的基盤を奪われた」（二九七頁）として、ロストフツェフの説に従っている。

最後の第五章「地中海世界の崩壊」においては、ローマ帝国における階級闘争として、奴隸反乱と原住民反乱が扱われている。ローマ市民共同体的上層と下層の対立は、階級闘争としては捉えられていない。

まず奴隸反乱の問題であるが、これについては、この問題の専門家と言うべき土井正興氏の独擅場であろう。土井氏によると、スバルタクスの反乱の目標は祖国帰還であり、反乱奴隸の主力はガリア・ゲルマニア・トラキア等、故郷における共同体の自由の記憶をいまだ失っていなかった人々であったという。即ち、彼らの戦いは、奴隸の奴隸所有者に対する階級闘争であると同時に、奪われた共同体を回復しようとする闘争でもあった訳である。次に、シチリアの二次にわたる奴隸反乱である。第一次の場合の攻撃目標は、シチリア人の大土地所有者であったが、第二次の場合には、ローマ騎士とイタリア人の大土地所有者も、攻撃目標に含まれた。そして、いずれの場合も、「奴隸王国」の建設が彼らの目的であり、蜂起した奴隸の出身は、小アジアで最近奴隸化された者や、シチリア先住民の奴隸化したものではなかったかと推定できるといふ。

次に、原住民反乱であるが、ここにおいて問題になるのは、ローマの支配下に入れられることに対する防衛戦争ではなくて、すでにローマの支配下に入った諸民族の、ローマ支配からの脱出・独立のための闘争であり、従って、時代的には共和政末期から帝政初期にかけてに限定される。著者は、主としてダイソンの研究

に拠りながら、ウエルキンゲトリクスの反乱、前一年からのパ
ンノニア・ダルマティア反乱、アルミニウスの反乱、ボウディッ
カの反乱、バターウイの反乱の五つを分析して、それらに次のよ
うな共通点を発見する。第一は、反乱がローマ化の初期の段階で
勃発したこと、第二は、それがローマの要求が強化された時点で
起っていること、第三は、一人の卓越したカリスマ的指導者の存
在、第四は、原住民主国の存在の記憶がまだ新しいことである。

最後に著者は、諸共同体の分解には非常な地方差があり、「都
市化」が最も盛んであった帝政初期の二百年間においても、その
影響を全く受けなかった地域さえあったことを示し、更に、二世
紀末になると、これらの共同体の重要性が高まったであろうこと
を、碑文その他から推定する。即ち、この頃になると、経済生活
の中心は次第に都市から村落と大所領に移動し、又共同体は、有
力者に従属化してゆく傾向を持つ。農業における奴隸制が後退し、
小生産が優勢になるにつれて、共同体の重要性も復活したのだと
いうのである。

これと並行して、古代末期の都市の没落がはじまる。重い負担
から逃れる為に、都市住民の多くは農村の有力者（大土地所有
者）のもとへと逃れ、大土地所有者の所領は、次第に自給自足的
な荘園へと変化してゆく。しかし、彼らはいまだ、ローマ帝国の
軍事力なしに、共同体を安全に把握できるだけの力を持ってはい
なかった。こういう情勢の下で、皇帝と軍隊とホネステイオーレ
ス層は、都市を見限り、大土地所有者と諸共同体に結びついてゆ
く。こうした中から、やがて四世紀の後期ローマ帝国が現われる。
以上が、弓削教授の、古代末期への展望である。この章の叙述が

やや駆け足気味なのは、著者の心が早くもヨーロッパの空に飛ん
でいたためであろう。

次に、本書全体についての私見を、少しばかり述べさせて頂き
たいと思う。こういう本を、世間では「難しい本」と呼ぶのであ
ろうか。決して、内容そのものが高度で理解できないというので
はない。文体と表現、それに加えて構成の複雑さに伴う「読みに
くさ」なのである。まず、文体であるが、弓削教授は日頃よほど
ドイツ語に親しまれる機会が多いと見えて、純粹の日本語という
よりは、ドイツ語の直訳体のような文章が多いのが目立つ。また、
概念規定の部分などは、少しまわりくどい印象を与える。用語に
関して言うならば、本書を通じて、「共同体」という言葉が終始
使われているが、ここにいう「共同体」とは、あくまで一定規模
の農村的な集落をさすものようである。二一頁以下の「ポリス
を共同体とみなしうるか」などという議論には、正直いつてつ
て行けない。又、再三使われている「商品貨幣関係」という言葉
にしても、もう少しましな、定着した日本語に代えられないもの
であろうか。それに、「ローマ帝国支配の共同体論的構造」、「地
中海世界とローマ帝国の奴隸制論的構造」(各々、第二・三章の
表題)といった表現には、いささか抵抗を感じざるを得ない。

しかし、この書を難解と感じさせる最大の原因は、論の進め方
であろう。あまりにも、他の学者の学説紹介や引用が長いために
どこからどこまでが著者自身の意見であるのか分かりにくい。弓
削氏の学識の深さに疑念をはさむ者は少ないことであるし、もう
少し直接的に自身の意見を述べられた方がよかつたと思うのであ

るが、また、一つの議論の途中で、度々結論めいた部分が提出されるために、同じ所を循環しているような印象を与えがちである。平素は、なかなか説得力がある「読ませる」文体を駆使される氏が、このように肩に力の入った書き方をされたことが、悔やまれない。

内容全般について言えることは、氏の共同体論という観点に立てば当然かもしれないが、すべての事柄が内因論的に捉えられており、外的要因がほとんど無視されているということである。早い話が、イタリアにおける農業事情の変化に、気候の変化は無関係なのであろうか。それに、氏にとってのローマ帝国とは、どうやら帝国の西半分のことであるらしい。人口密度もはるかに高く、また経済力の点から言っても重要であった筈の東方諸属州については、ほとんど触れられていないのである。視点を東に移せば、もう少し違ったローマ帝国像が見えてくるように思うのであるが、以上、難点ばかりを指摘した形になってしまい、まことに申し訳ないが、この書が多くの方の長所を持っていることは、言うまでもない。非常に感心したのは、参考文献の新しきである。何しろ、同時に発売された筈の、太田秀通『東地中海世界』が、随所に頁数を明記して引用されている(例えば、第一章の注四〇、四七、五〇等)のだから驚きである。その他、注や巻末の参考文献の中で挙げられている研究書・論文・翻訳の数も相当数に上り、この方面の研究を始めようとする者にとっては、大いに有益であろう。確かに、様々な意味で、私にとっては教ええられる所の多い書であった。

最後に一言つけ加えれば、この本の題名としては、『地中海世

界とローマ帝国』よりも、『ローマ帝国の共同体的構造』ぐらいの方が、よりふさわしかったのではないだろうか。現在の書名から読者が連想するのは、おそらくは、ローマ帝国が地中海周辺の諸地域を統合して世界帝国を築き上げるまでの、諸国家・諸民族とローマとの関係、あるいはその後の、「ローマ化」の過程の、もう少し具体的に幅広い叙述であろうから。

以上、この本を読み終って感じたところを、素直に書き連ねたまでである。いまだ浅学の身で、大先輩の作品を批判するなど、おこがましい限りであるが、「書評を書く」という立場上やむを得ぬこととして、御海容を乞う次第である。

(B6判 三七八頁 一九七七年一月 岩波書店 一七〇〇円)

(京都大学大学院生